

条の改憲は、他国に出かけていって戦争をするためのものなのです。「自衛」「安全保障」とか「世界平和」といえば、良いことをしているように聞こえますが、六〇年前の戦争だって、同じ理由で「守る」ため「平和」のために行われた行為ではなかったのでしょうか。「平和」や「正義」を一方的に主張しつつ「武力行使」をするということは、される側から言えば「侵略」というのだと思います。

9条の会は、作家の大江健三郎さんから9名で結成され、その後全国で四千を超える九条の会ができました。そしてこの度、呉でも、大学教授、芸術家、宗教家、マスコミ、教員などさまざま分野の方々が呼びかけ人となって九条を守る集

いが開かれたというわけですが。

講師の菅原氏は遺族(ニギマ)で餓死した父をはじめ、無理やり日本兵にされ英霊として祀られている台湾人、軍事物資を運ばされ撃沈させられた疎開児童、みんな誤った国策による被害者であり悲惨な死。しかし靖国によって「悲惨な死」が「尊い死」にすりかえられると、遺族は国に対する怒りや悲しみをぶつけようがなくなる。さらに「尊い死」と国家に祀られることに充足感さえ抱いてしまう倒錯さえ起こる。悲惨を名譽に、名譽は「後に続け」となる。靖国神社は、戦争するための精神的動員体制の機軸。と話をされました。

ビルマの豎琴は音もなく

—ミャンマーのパゴダ巡り④ 齊藤 久仁子

幼児の化粧、タナカ

ミャンマーでは、顔や、なかにはむき出した手足にまで、おしろいを塗っている子どもに出会う。塗っていない子どもが珍しい。顔じゅう真っ白に塗っている子、一部だけ塗っている子、曲線や直線で模様を描いて



いる子、遊んでいる子もポーターや物売りをしている。これはつっぱっているのでも目立ちたがっているのでもない。スポーツの応援でもりあがっているのでは勿論ない。これは日焼け止めとして親が毎朝塗ってやるのだそ



うだ。男女ともにはある。中学生くらい以上の年令の子どもは塗っていない。初めて見た時は驚いたが、一部の人の一時的流行ではなく民族の伝統なのだ。あるお寺の門前市でガイドが「これタナカです。」と見せてくれたのは、なんと木片である。この木の皮を水の入った容器の底に荒砥を置いてすりおろしている、底のどろっとしたたまりを塗るのである。その木片やすり下ろした粉を売っている。型紙を使って模様を描くお洒落な人もいるという。

道を行く僧侶の数の多さ

首都ヤンゴンの北七十里の所にバゴという小さな町がある。十三世紀から十六世紀にかけてモン族の王都であった。

モン族という「悲劇の民族」という印象が記憶に新しい。インドシナ問題で新聞に現れる時のモン族は「ラオスの山岳民族」として報道される。ベトナム戦争中は米軍の先兵として北ベトナムやラオス共産勢力と戦って故郷に帰ることが出来なくなった。戦わせた米軍は負けたとたんアメリカに引き上げてしまった、最近もタイ側国境の難民キャンプにいるモン族のことが報道された。精霊信仰の儀式で